

退職園長による子育て塾(5)

ふるさと感

戎 喜久恵

お月見

勤めながらの子育ての中で、忘れられない出来事はたくさんあります。

九月のある日、仕事が遅くまであり少々疲れ気味で家にたどり着いた私は、玄関に懐中電灯を持ち並んで座って、私の帰りを待っている子どもたちに出

会いました。

「今日は、お月見だから……」という娘の声をどのように聞いたかは憶えていませんが、花ばさみをもって子どもたちとススキを採りに出かけました。

「ごめんよ」「ごめんね」といつもの台詞を口にしながら。

月見だんごができあがった頃は中秋の名月は小さ

く天上にありました。

あわただしい子育ての中で子どもの期待を裏切ることとは度々でしたが、このときばかりは胸に応えました。勤めながらの子育てでは日常的に子どもと密につきあうことは出来ませんが、七節句くらいは子どもと一緒にしようと思心に決めていたのです。

私の母は現在九十八歳ですがお正月、ひな祭り、こどもの日、七夕、お月見などの年中行事は丁寧にしています。ひな祭りが来ると母と一緒にお正月に作っておいたあられを出して煎ったこと、火が通つてくると硬いあられの角がふくらんで次第に全体がふくらんでいく様子、ふくらむ音や芳しい匂いなどを懐かしく思い出します。塗り物の遊山箱に巻ずしやようかん、ゆで卵などを詰めて裏山に出かけたこと、友だちと交換して食べたこと、ちよつと後ろめたい気持ちを味わいながら残った巻ずしを転

がして競ったことなど。私の内にふるさと感と共に蘇る懐かしさの感覚を子どもたちが成長したときに持っていてくれることを期待していたのです。

この小さな事件はそれから後の私の子育ての中で「そんな頼りない親でも、子どもは必死で信じようとしているのだよ」と度々思い起こされることとなりました。

### お月見だんご

私の子どもの頃は、母がひき臼で餅米を挽くことから始まったお月見だんごも、今ではだんごの粉、上新粉として売られていて、いつでも誰でも簡単に作れるようになっていきます。「にしサター」の子どもたちは「耳たぶくらいの柔らかさにしてね」という赤澤先生の指導で水と粉を練っています。どの子どもやりたくて順番を待ちきれません。泥だんごとは違う好奇心が働いているようです。はじめて経験す



▲月見だんごは丸く丸く

る子はボールに両手を入れてうれしそうです。はじめは手にくっつきますが次第に手やボールに付かなくなるが大発見のようです。これは体験してはじめて分かる感覚です。

少しずつ取って丸めていきます。月見だんごは丸いイメージを持っているのでしょうか。どの子も丸くしています。沸騰した湯に入れて浮かんできたらできあがりです。浮かんだだんごを網杓子ですくい取るのは少々危険な仕事ですが小学生が担当を買って出ます。自分に出来る仕事を見極める力を持つていくことに感心します。その様子を見ていてやれそうと思った幼児が申し出ると小学生は上手にアドバイスをしながらやらせています。

「にじサタデー」が始まった頃は、我が物顔に行動し危険なこともあった小学生たちですが、共に過ごす経験が重なるにつれて年少児をうまくリードするようになってきています。にじサタデーの始まりで

は、参加者を〇歳から三歳の子どもとその保護者としました。しかし、卒業がないことや兄弟が一緒に参加することから今では年齢の幅が大きくなっていますが、昔の原っぱの役割が果たせていい環境になってきています。

たとえば家庭では兄と弟と役割が決まってしまうのですが、ここに来るといつも威張っている兄も、もつと年長者と遊ぶ経験が出来、いつも弟として兄に頭が上がらない子も、もつと小さい子には頼もしいお兄さん役を果します。

### はじめてのにじサタデー

九月二十八日。ドキドキしながら尼寺分校の門を入ると、まず私の目に飛び込んできたのが何とも楽しそうに生き生きと遊んでいる子どもたちの姿でした。「ああ、ここはきつと楽しいところなんだろうな」と感じた私の気持ちは娘にも伝わったのか、い



▲「おにいちゃんといこうよ」



▲黙々と丸めて こんなにできました

つもなら初めての場所ですぐにとけ込むことが出来ない子なのにその日はすーっと私のそばを離れ友だちの中に入ってしまったのです。私たち親子の興味をひく遊びがいっぱいあり、特に娘がはまっていたのがおだんご作りでした。「あんなに夢中になれるものなの？」と思うくらい黙々とおだんごを丸めて作る姿は真剣そのもの、大小形は決して見栄えがよいとは言えないけれど、自分も参加して作ったという喜びと満足感からか、おだんごをいっぱい食べてお代りまでしたのには驚きました。ここではどんなに小さくても自分の存在を認めてくれてその子に応じた遊びを心ゆくまで楽しませてもらえる。だから子どもたちも失敗を恐れず何にでも挑戦してがんばれる力が身に付くのだ！と、ここに参加して改めてそう思いました。子どもは遊びの中から物事を考え、吸収し、学んでいくものなんですよね。まだ、たった一回しか参加していないけれど、娘の今まで

見たことのないような楽しい表情とがんばる姿には  
私自身が感動し、日頃いかに子どもに対して自分勝  
手な接し方しかしてこなかったのか思い知らされ、  
子どもの存在を認めてあげなければ……と反省させ  
られた次第です。(以下略)

レインボー通信より (まゆママ)

### 栗ひろい

「今回は栗ひろいに行きます」というお知らせを聞  
き、今回私の用意したものは「トング」と「蓋付き  
バケツ」。

トングはイガを触ると痛いので挟んで取るよう  
に、蓋付きバケツは栗をもって帰るのに痛くないよ  
うに。

《いざ山へ》

山へ着くと「栗を入れてね」と配られたビニル  
袋。ビニル袋? ヤブレル……と思っていると、栗を

拾った人が足でムギュツとイガを踏み、取り出した  
栗をビニル袋の中へ。

ナ、ナント!! なるほど、そうするのか!!

散乱したイガを見て「イノシシが食べたのね」と  
先生の声。

イノシシ!! 子どもと顔を見合わせて驚く。

イノシシがここにいるなんて!!

この山に!?! (山にいなければ、どこにいるという

のだ?)

《山のなかへ》

うつすらとした光、ひんやりとした空気。倒れか  
かった木。

ジュルジュルとした枯れ葉を踏み、山道を進んで  
いくと、二歳の娘は、「ママ、暗い。こわいよ」と  
私の腕に抱きつきました。

彼女にとって初めての山は、不思議で不気味な世  
界だったようです。

五歳の息子は見たことのない大きな大きなクモの巣、ヘビのような巨大ミミズ、毒キノコ（ほんど？）、クマの足あと（これは人のだろう）、などに心を弾ませ楽しんだようです。

秋の自然の中で心を揺らし、大発見にわいた楽しい時間でした。

レインボー通信より (ママ)

自然の中ではあつという間に時間が過ぎていきます。

イガの中に入ったままの栗をどうして取り出すか。高い枝になっている栗をどうして落とすか。へたをするといがくりが頭上に落ちて痛い目にあいませす。

ここでは親が子に教えるのではなく、経験者が未経験者に教えることとなります。

長い竿の扱いは時間とともにうまくなっていきま



▲長い竿を巧みに扱って

す。

「おいしそう。こんなにつやつやしているとは知らなかった。店先の栗しか見たことなかった」と栗ひろいに意欲的な母親たち。今年は小雨の中「大丈夫、大丈夫！」と子どもたちと雨具をつけて出かけました。

この場所で「にじサタデー」を始めようと思ったきっかけは、恵まれた自然があるにもかかわらず、自然から遠のいた生活が当たり前になっていることに疑問を感じていたからです。幼稚園では、それを補うために生活の中に自然を持ちこむことも多くなりましたし、園外保育などでお出かけ自然体験もしますが、大勢が自然の中で過ごすことには限度があります。たまたま自然に恵まれた分校が休校になり、このままではもったいないと思ったのがきっかけです。自然の中では私たちが「○○遊び」や「×

×活動」、「ねらいを込めた環境構成」というものを用意しなくても子どもたちは自然を相手に自分の発達に見あった様々な生活を生み出していきます。田植えが始まると二週間もすると田圃にはまち針の頭ほどのオタマジャクシが泳ぎます。捕まえようと手を入れると水が濁って見つけられません。しばらく待つことを余儀なくされます。今度は水が濁らないように手を入れる工夫がいきます。子どもは失敗しながら考えます。そして成功するまであきらめません。

苦労の後にジワッとこみ上げる力を感じます。こんな経験を大人になったときに「懐かしさとともに蘇るふるさと感」として取り出せるように、心のどこかにしまっておいてくれることを願っているのです。  
(神戸女子大学)